Nyāyabhūṣaṇa における prāpyakārivāda について

山　上　證　道

N(yāya) S(ūtra) 1-1-4 が，知覚は感官と対象との接触より生ずると規定してることでも明らかなごとく，Naiy(āyika) は感官と対象とが接触することによつて対象の知覚が生ずると主張する。それ故 Naiy の場合，感官は prāpyakārin であるといわれる。これに対して仏教徒は，触覚・味覚・嗅覚の各感官は prāpyakārin であるが，聴覚・視覚・意の三感官は対象と接触しないで対象の認識を生ずるものであり，それ故，aprāpyakārin であるという。これらをめぐる論争は Naiy 文献にもしばしば登場するが，ここでは N(yāya) Bhū(ṣaṇa) で論じられているこの議論を，Naiy の伝統的見解を参照しつつ紹介する。

NBhū は，まず，視感官と対象との接触を否定する者からの疑問を提示する。「どのようにして接触 (prāpti) があるのか。①対象が視感官の所へ来て接触するのか，それとも，②視感官が対象の所へ出ていつて接触するのか。まず，前者の場合は我々の知識と矛盾する。なぜなら，もしそうであるなら，火を見たときには眼をやけどすることになつてしまうであろうから。後者の場合も我々の知識と矛盾する。なぜなら，もしそうであるなら，矢が対象物につき立つているのが見えるように視感官が対象に接触しているのが見られるはずである。」[1)]

これに対して NBhū は，②の見解が正しいとして次のように述べる。「視感官が光線 (raśmi) となつて対象の所へいきそれと接触するのである。ちようど光が対象の所へいつて接触し，それを明らかにするように。またその視感官の光線は眼に見えないものであるから我々には知覚できないのである。眼に見えないものが対象を明らかにすることはありえない，と反論しても，そうではない。ランプの光と一緒になり対象を明らかにしえる。だからこそ，不可見力 (adṛṣṭa) の能力によつてその眼の光線が我々にも見えるものなどは，外部の力（ランプの光等）に頼らなくても対象を明らかにする。例えば，夜間活動するある種の動物（猫等）

1) NBhū p. 94 *ll.* 12-15.

2) Ibid p. 95 *ll.* 3-8.

の眼の光線は我々にも知覚できる。」[2)]

この NBhū の理論は，NS 3-1-34, 42, 44 等に述べられる見解を踏襲しているものである。

次に NBhū は，このような prāpyakārin 理論に対する aprāryakārin 理論側からの反論として，まず四個を挙げるが，この四個はすべて，既に，N(yāya) V (ārttika) が提示しているものである。

反論A：「視感官と聴感官とは prāpyakārin ではない。離れた所にあるものの認識があるから (sāntaragrahaṇāt)。なぜなら，もし視感官と聴感官とが prāpyakārin であれば，木と斧との間にすき間がないように，視感官と対象との間にはすき間が見られないであろう。」[3)]

反論B：「視感官よりも大きなものを認識することがあるから (pṛthutaragrahaṇāt) 視感官は prāpyakārin ではない。爪切りばさみで爪を切る時のように，作用するものが接触しているのが見られる部分だけに作用しているのが知られる。だから，小さな視感官が，大きな山等を認識することは妥当でない。」[4)]

反論C：「視感官は prāpyakārin ではない。枝と月との同時認識があるから。もし視感官が対象の所へ到達して一個一個の対象に接触していくのであれば，一個一個の対象が時間をおいて認識されるであろう。しかし，実際にはそのようなことはない。」[5)]

反論D：「音が波状となつて来て，耳に接触して認識されるのであるから，〔聴感官は prāpyakārin である〕と〔Naiy が〕いつても，そうではない。音の来た方向・場所を述べることが実際上あるから。耳の一部分だけで音が認識されるなら東・西などの方向，林・森などの音の発生した場所を述べることができなくなるであろうから。」[6)]

以上A～Dについて少し詳細に検討してみよう。

まず，反論Cに関しては，これに対する Naiy 側からの論駁も NBhū と NV とは一致している。すなわち，NBhū は「(枝と月との同時認識があるからという) この理由は asiddha であるから正しい理由ではない。なぜなら，枝と月との

3) Ibid p. 94 *ll.* 11-12; cf. NV (ed. with NS, NBh & NVT Calcutta '39) p. 101 *ll.* 7-8.

4) Ibid *ll.* 19-21; cf. NV p. 102 *ll.* 4-5.

5) Ibid *ll.* 21-23; cf. NV p. 102 *l.* 6-p. 103 *l.* 2.

6) Ibid *ll.* 25-27; cf. NV p. 102 *ll.* 5-6.

認識は実際には，別の瞬間に起つているのであるが，あまりにすばやいので同時と思われるのである。」[7] と論難し，NV も百枚の蓮の花弁を針でつきさす場合を例にとり，同様のことを述べているのである[8]。

次に反論Dについては，NBhū と NV とでは少し事情が異なる。つまり，聴感官が prāpyakārin でないという NBhū に対して，NV は同じ理由のもとに，視感官が prāpyakārin ではないことを説明しているのである。さらに，この反論に対する解答も両者それぞれの立場から与えられる。すなわち，NV は視感官を論点とした立場からこの反論の不当なことを説き[9]，NBhū は聴感官に問題を限定して論駁しているのである[10]。この両者の記述の相違は，おそらく NV が提示した反論Dが聴感官にも適用されうることに Bhāsarvajña が気付き，NV の議論を補充する意味で聴感官に限定した議論を行つたということに基くものであろう。

一方，反論A・Bであるが，NV がまず最初にこの二個を引用・論駁していることでも理解されうるように，この二個は aprāpyakārin 理論の論拠として最もよく知られたものであつた。というのも，この二個はきわめて古い時代から提示されてきたものなのである。N(yāya) V(ārttika) T(ātparyaṭīkā) も引用しているごとく，Dignāga が Pramāṇasamuccaya で明確にそれを指摘している。「prāpyakārin を主張する場合には，知識が感官と対象との接触より生ずるのであるから，離れた所にある対象の認識もなければ感官より大きな対象の認識もないことになろう。」[11]

さらに Abhidharmakośa 時代にも同様のことが論じられたことは A(bhidharma) K(ośa) Bh(āṣya) の次のような注釈からもうかがえる。「眼と耳と意とは対象と接触しない。だからこそ，事物は遠くから見られるけれども眼中の目薬は見られないし，音も遠くから聞かれるのである。」[12]「接触する対象を捉えると説かれた鼻などの三感官は，等しい大きさの対象を捉えると考えられる。感官の極微があるのと同じだけの対象の極微が集つて認識を生じるから。しかし〔接触しないで対象を捉える〕眼と耳とは不定である〔つまり感官よりも大きな対象や小さな対象を捉えることもある〕。」[13]

---

7) Ibid p. 95 *l.* 18–p. 96 *l.* 1.
8) NV p. 105 *ll.* 6–7.
9) Ibid *ll.* 2–5.
10) NBhū p. 96 *ll.* 5–8.
11) M. Hattori: Dignāga on Perception pp. 37, 124; NVT p. 102 *ll.* 20–21.
12) AKBh (Bauddba Bharati Ser. No.5) p. 119 *ll.* 4–6.

また同質の議論は，既に NS 3-1-33, 45, 46 でも行われている。従つて，NS や AK にみられるこれらの論争の背景に存在していた先輩諸学者の様々な議論を Dignāga が整理し，sāntaragrahaṇa と adhikagrahaṇa (=pṛthutaragrahaṇa) との二形体にまとめ上げ，NV が，さらには NBhū が，それを紹介し，論んじているといえる。

さて，この反論A・Bに対する NV の論駁は次のような手順で行われる。まず反論Aに対しては，sāntaragrahaṇa の語に対し，aprāptasya grahaṇam, sahāntareṇa grahaṇam, sāntara iti grahaṇam の三解釈が可能であるとし，そのいずれもが妥当でないことを指摘することにより，この理由の不当性を主張する。また反論Bに対しては，単に，視感官と対象との結合 (saṁyoga) によつて pṛthutaragrahaṇa が生じるとする。この saṁyoga は，Naiy にとつては部分的に起るもの (avyāpyavṛtti) であるから，眼より大きな対象を眼が認識することがあつても問題はない，とするのである[14]。

では次に，反論 A・B に対する NBhū の論駁を見てみよう。

まず反論Aに対しては，次のように答える。「sāntaragrahaṇāt という理由は asiddha であるから正しい理由ではない。なぜなら感官は，感官では捉えられないもの (atīndriya) であるからどうして対象と感官とが分離しているのが知覚されるのか。むしろ，対象と接触している眼等の感官が対象を知らしめるのであるということが，光等の実例から推理によつて理解される。」[15]

つまり「眼と耳とは aprāpyakārin である」という主張に対して，「離れた所にあるものの認識があるから」という理由は，pakṣadharma ではないというのである。なぜなら pakṣa である感官は atīndriya なのであるから，離れた対象を認識することが知られないというのである。

次に反論Bに対しては次のように難んじている。「pṛthutaragrahaṇāt という理由は anaikāntika である。なぜなら，ある分量の光はそれだけの大きさの対象しか明らかにしえないとはいえないから。」[16] つまり，「眼と耳とは aprāpyakārin である」という主張に対する理由「それより大きなものの認識があるから」は，sapakṣa である aprāpyakārin に存在すると同時に，vipakṣa である prāpyakārin

13) Ibid p. 123 *ll.* 2-6.

14) Cf. NV p. 103 *l.* 2-p. 104 *l.* 7 cf. Hattori op. cit. p. 126.

15) NBhū p. 94 *l.* 30-p. 95 *l.* 2.

16) Ibid p. 95 *ll.* 15-16.

例えばランプの光にも存在する。なぜなら，prāpyakārin である光も，その光源の大きさより大きな対象を明らかにするからである。従つて，この理由は sādhāraṇânaikāntika になり，正しい理由ではない。

以上，反論 A・B に関しては，NV より NBhū の方がより論理学的にこれを処理しようとしているようである。

上記A～Dの反論は，NV の記述に基いて NBhū で論んじられているものであるが，NBhū には NV に見られない議論も若干見出される。

まず AKBh にも見られる「眼に接触しているのに目薬が認識されないのはどうしてか」という反論である。これに対して NBhū は次のように答える。「感官と接触しているものがすべて認識されるとはきまつていない。むしろ，外的感官により認識されるものはすべて感官と接触しているものである，ということが定つているのである。」[17] つまり，感官との接触は，知覚が生ずる必要条件ではあるが十分条件ではないということでこの難問を避れようとしているのである[18]。

次に，「感官は aprāpyakārin である，ちようど磁石のように。」という反論が提示されている[19]。磁石が接触していない鉄を引きよせる力を持つているように感官も接触していない対象を知覚する作用を持つという主張である。これに対し，NBhū は，鉄を引きよせる磁石も実は prāpyakārin であるという。すなわち，「磁石に触れて特殊な風が生じる。ちようど身体内の息のように。その風が鉄に到達してその鉄を磁石の方へ引きよせるのである。ちようど息を吸い込むと空気と一緒に水も吸込むようなものである。〔従つて磁石は prāryakārin である。〕」[20]

さらに NBhū は議論を一歩進める。すなわち，「mantra をとなえて神の恩寵を得るのも mantra が神に触れ神を喜ばし，その神は，祈つている人の意図するものに触れてそれを叶える。かくのごとく，この世の一切のものは prāpyakārin である，」[21] と主張するのである。ここには，関係概念を全て実在視する Naiy の関係論の一部が如実に現れているといえよう。

---

17) Ibid p. 97 *ll.* 12–14.
18) Cf. NVT p. 118 *ll.* 16–18.
19) NBhū p. 96 *l.* 22–p. 97 *l.* 1; cf. NVT p. 106 *ll.* 22–23.
20) Ibid p. 97 *ll.* 1–3; cf. NVT p. 107 *ll.* 8–9.
21) Ibid p. 97 *ll.* 4–5.